

令和7年度 シラバス

科目名	運動学 I (30/60)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	中山 克也
実務経験	理学療法士として18年以上の実務経験あり				
到達目標	基礎的な人体構造、機能の理解。それを自分なりに表出できるように。				
履修上の注意	理学療法科学生としての自覚を持って臨むこと。				
成績評価方法	学科試験、出席状況等によって判定する				
教科書	基礎運動学(医歯薬出版)				
参考書	都度配布				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	運動学とは	運動学についての総論
第2回目	身体運動の面と軸	矢状面、全額面、水平面及び軸
第3回目	モーメントとてこ	モーメントとは、第1・第2・第3のてこ
第4回目	運動学の基礎知識(1)	関節の構造
第5回目	運動学の基礎知識(2)	関節の機能と神経系
第6回目	上肢帯と肩関節の運動(1)	上肢帯と肩の構造(1)
第7回目	上肢帯と肩関節の運動(2)	上肢帯と肩の構造(2)
第8回目	上肢帯と肩関節の運動(3)	上肢帯と肩の機能(1)
第9回目	上肢帯と肩関節の運動(4)	上肢帯と肩の機能(2)
第10回目	肘関節と前腕の運動(1)	肘関節・前腕の構造
第11回目	肘関節と前腕の運動(2)	肘関節・前腕の機能
第12回目	手関節と手の運動(1)	手関節と手の構造
第13回目	手関節と手の運動(2)	手関節と手の機能
第14回目	上肢帯から上肢まとめ(1)	基本的な上肢の運動の復習
第15回目	上肢帯から上肢まとめ(2)	基本的な上肢の運動(実技)
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	社会福祉概論	(30)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	山口 信治
到達目標	暮らしを守る公(公)の社会保障制度の一環社会福祉をまなぶ					
履修上の注意	レポート取り組みに期待					
成績評価方法	出席、レポート提出20% 試験80%					
教科書	系統看護学講座 専門基礎分野 社会保障・社会福祉(医学書院)					
参考書						

回 数	項 目	授業内容
第1回目	暮らしを下支えする社会的仕組み	テキスト、はしがきよりキーワードを探る
第2回目	暮らし(生活)	くらし(人、時、場) 生活苦 第8章ライフ、QOL
第3回目	二大制度	暮らしを下支えする二大制度
第4回目	イギリスの社会保障	礎を築いた人々と活動 第9章参照
第5回目	二大制度の比喩	二大制度 美しい森にたとえ そのマザーツリー
第6回目	保障	保障「果実」所得保障と対人社会サービス
第7回目	社会保障制度の動向	社会保障、社会福祉の動向 第2章B
第8回目	社会福祉	社会福祉(1)分野:子、高齢者、障碍者福祉
第9回目	社会福祉	社会福祉(2)
第10回目	社会福祉の支援、技術	社会福祉(3)社会支援ケースワーク 第8章AB
第11回目	社会福祉の支援、技術	社会福祉(4)社会支援グループワーク 第8章C
第12回目	社会福祉の支援、技術	社会福祉(5)社会的支援 間接援助技術 第8章D
第13回目	社会福祉の支援、技術	社会福祉(6)社会的支援、人的資源
第14回目	連携という社会的技術	制度の活用 「連携」をキーワードに
第15回目	制度と倫理	福祉制度の課題 制度つくりは人なり 倫理上のジレンマ 第8章E
備考		

令和6年度 シラバス

科目名	コミュニケーション演習 (30)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	谷 裕武
到達目標	理学療法士、社会人としてのコミュニケーション力について学ぶ。				
履修上の注意	遅刻者は担当教員に理由を述べ着席。早退(途中退室)も同様。				
成績評価方法	学科試験100% (出席状況により加点、減点有り。)				
教科書	特になし				
参考書	配布資料				

週 数	項 目	授業内容
第1週目	オリエンテーション コミュニケーションとは	理学療法士にとってコミュニケーションとは 自己紹介
第2週目	医療者になるための準備	PTを目指すあなたへ
第3週目	医療者になるための準備	自分を理解しよう(自己肯定感診断)
第4週目	医療者になるための準備	コミュニケーション力を育もう
第5週目	医療者になるための準備	自律した自分になろう
第6週目	会話上手になるためには①	会話上手になるために
第7週目	会話上手になるために①	会話上手になるために
第8週目	社会人のマナーとしての コミュニケーション①	身だしなみについて
第9週目	社会人のマナーとしての コミュニケーション②	挨拶について
第10週目	社会人のマナーとしての コミュニケーション③	電話対応について 電話のかけ方
第11週目	社会人のマナーとしての コミュニケーション④	実習先へのお礼状の書き方
第12週目	社会人のマナーとしての コミュニケーション⑤	電子メールのマナー
第13週目	ヒヤリハットと医療事故	ヒヤリハット事例と医療事故と対処法
第14週目	問診情報収集①	医療現場での必要な情報収集の実践①
第15週目	問診情報収集②	医療現場での必要な情報収集の実践②
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	科学の基礎	(30)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	鎌田 啓太
実務経験	理学療法士として5年以上の実務経験あり					
到達目標	人体運動に必要な基礎知識について理解を深める。					
履修上の注意	私語など他の学生および講義進行の迷惑にならないよう留意すること。					
成績評価方法	学科試験100%(出席状況により加点、減点有り)					
教科書	毎回 授業用資料配布					
参考書	なし					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	授業説明	理学療法士にとって人体運動の必要性。講義内容説明
第2回目	生体の構造	運動器(骨格・筋)と神経系について
第3回目	身体運動	身体運動の面と軸 身体に働く力について
第4回目	身体運動	筋活動について
第5回目	身体運動	身体に働く力について (筋力と外力・てこ・人体とてこ・滑車)
第6回目	身体運動	
第7回目	身体運動	
第8回目	姿勢	姿勢と重心 立位姿勢に働く力
第9回目	姿勢	姿勢と重心 立位姿勢に働く力
第10回目	体幹 股関節 膝関節 足関節 の アライメントについて	立位姿勢において、体幹・股関節・膝関節・足関節に働く力
第11回目		
第12回目		
第13回目		
第14回目	歩行について	歩行の基礎、歩行時における関節・筋活動、歩行における推進力
第15回目	講義まとめ	講義まとめ
備考	上記内容は講義の進行状況などにより変更することがある	

令和7年度 シラバス

科目名	健康科学 (30)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	非常勤勤務
到達目標	社会の問題とされている生活習慣病に関する基礎知識とその改善方法を学び、また、近年多く見られる若年女性健康問題や小児肥満などについても考え、理解を深める。 さらに、怪我への対処方法、運動・栄養が身体に与える影響について、スポーツ科学の観点から学習し習得することを目標とする。				
履修上の注意	授業資料等を配布するが、授業中のポイントなどもメモすること。				
成績評価方法	本試験100%で評価する。				
教科書	毎回プリントを配布する。				
参考書	スポーツ科学に関する参考書を使用				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	授業目的、進め方の説明・健康とは	授業概要の説明、授業の目的と到達目標についてのガイダンスを行う。現代社会における健康を阻害する環境について理解する。
第2回目	健康とは	運動・栄養などの観点から生活習慣について考える。女性の健康問題についても理解を深める。
第3回目	睡眠と健康	睡眠のメカニズムを理解し、その重要性について考える。
第4回目	睡眠と健康	睡眠に影響を与える要因を理解し、睡眠と脳機能の関係性について考える。
第5回目	肥満と運動	肥満、メタボリックシンドロームの要因について理解する。
第6回目	肥満と運動	肥満の予防及び改善に有効的な運動療法、食事療法について理解する。
第7回目	スポーツ医科学	運動時に発生しやすいケガについて理解する。
第8回目	スポーツ医科学	ケガの予防および処置法について理解する。
第9回目	応急手当法	一次救命処置の手順について理解する。
第10回目	応急手当法	AEDの使用法について理解する。
第11回目	免疫とストレス	人間の免疫機能について考える。
第12回目	免疫とストレス	ストレスと免疫との関係を理解する。
第13回目	脳科学と疲労	脳の構造及び機能について理解する。
第14回目	脳科学と疲労	現代の疲労関連問題を脳科学の視点から考える。
第15回目	まとめ	これまでに学習した健康および生活習慣に関する内容を復習する。
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	人間発達学	(30)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	鎌田 啓太
到達目標	国家試験の重要項目である運動発達、発達検査、反射、反応等の知識を得る					
履修上の注意	授業で学んだことを復習する習慣をつける					
成績評価方法	学科試験80% 小テスト20%					
教科書	イラストでわかる正常発達(医歯薬出版)					
参考書	特になし					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	発達概念	胎生期、新生児期、学童期、成人期、老年期の概念
第2回目	人間発達(発達理論)	エリクソンの発達理論、ピアジェの発達理論など
第3回目	発達検査	DENVERⅡ 田中ビネー知能検査など
第4回目	姿勢反射、反応	運動発達の背景、基盤 反射反応の有無、評価
第5回目	運動発達(0~3ヶ月)	非対称な姿勢から正中位指向まで
第6回目	運動発達(4~6ヶ月)	ボトムリフティングから方向転換まで
第7回目	運動発達(7~9ヶ月)	機能的な運動での移動方法など
第8回目	運動発達(10~12ヶ月)	四つ這い移動から座位姿勢変換など
第9回目	運動発達(13~18ヶ月)	初期歩行から安定した独り歩き
第10回目	6歳までの発達	微細運動から言語、社会的発達
第11回目	上肢機能の発達	目と手の協調性や体のバランスなど
第12回目	ADLの発達	遊び、食事、排せつ、更衣
第13回目	認知、社会性の発達	環境刺激の情報処理、感覚、知覚、認知
第14回目	学童、青年の発達	からだの急激な成長、生理的弯曲など
第15回目	成人老人期の発達	肥満、収縮期血圧の上昇、老化まで
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	医学用語	(30)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	安田 美紀
到達目標	リハビリテーションの臨床で活用する医学英語を通して、理学療法についての概略を理解する。					
履修上の注意	私語を慎み、主体的に参加すること。					
成績評価方法	学科試験100%(出席状況・小テストにより加点、減点有り)					
教科書	リハビリテーションの基礎英語(メジカルビュー社)					
参考書	都度配布					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	INTRODUCTION	運動と身体:健康を保つために①
第2回目	INTRODUCTION	運動と身体:健康を保つために②
第3回目	CHAPTER I	リハビリテーションとは①
第4回目	CHAPTER I	リハビリテーションとは②
第5回目	CHAPTER II	リハビリテーションのための人体の基礎知識①
第6回目	CHAPTER II	リハビリテーションのための人体の基礎知識②
第7回目	CHAPTER III	人体の構造①
第8回目	CHAPTER III	人体の構造②
第9回目	CHAPTER III	人体の構造③
第10回目	CHAPTER V IV	疾患とりハビリテーション①
第11回目	CHAPTER V IV	疾患とりハビリテーション②
第12回目	CHAPTER V IV	疾患とりハビリテーション③
第13回目	CHAPTER V IV	疾患とりハビリテーション④
第14回目	CHAPTER V IV	疾患とりハビリテーション⑤
第15回目	APPENDIX	リハビリテーション医療に関する略語
備考	上記内容は講義の進行状況などにより変更することがある	

令和7年度 シラバス

科目名	解剖学 I (60) 時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	金田 研司
到達目標	人体の正常構造を機能との関連において理解する				
履修上の注意	全てを記憶する必要はなく、聴講しながら自分の頭で考え、自分なりの人体のイメージを作成する				
成績評価方法	学期末の筆記試験				
教科書	解剖学アトラス I ~ III(文光堂)				
参考書	なし				

回 数	項 目	授業内容
第1・2回目	総論-1	細胞(構造、増殖と分化)、上皮と結合組織
第3・4回目	総論-2	軟骨と骨、関節、筋(収縮とエネルギー)
第5・6回目	総論-3	神経、シナプス、神経筋接合部、筋紡錘
第7・8回目	運動器-1	脊椎(椎骨と椎間板)
第9・10回目	運動器-2	頸椎・胸椎・腰椎の特徴、脊椎のカーブ
第11・12回目	運動器-3	脊椎の靭帯、背筋と腹筋
第13・14回目	運動器-4	上肢帯(鎖骨、肩甲骨)とその運動に携わる筋
第15・16回目	運動器-5	肩甲骨と肩甲周囲筋
第17・18回目	運動器-6	腕神経叢と上肢の血管
第19・20回目	運動器-7	肘関節とその運動に携わる筋
第21・22回目	運動器-8	手・指関節とその運動に携わる筋
第23・24回目	運動器-9	骨盤、腰仙骨神経叢
第25・26回目	運動器-10	股関節とその周囲筋
第27・28回目	運動器-11	膝関節とその運動に携わる筋
第29・30回目	運動器-12	足関節とその運動に携わる筋、下肢の血管
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	リハビリテーション学 I (30)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	中本 麗奈
実務経験	理学療法士として6年以上の実務経験あり				
到達目標	医療・福祉分野における理学療法士の業務や役割について学ぶ。リハビリテーションチームについて理解する。				
履修上の注意	座学と実技での講義を実施する。				
成績評価方法	定期試験(100%)				
教科書	PT・OT・ST・ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論(診断と治療社)				
参考書					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	リハビリテーションとは	リハビリテーションの歴史・理念 リハビリテーション・マインドとは
第2回目	リハビリテーションの領域	医学的・社会的・職業的・教育的リハビリテーション
第3回目	リハビリテーションの介入	急性期・回復期・生活期リハビリテーション
第4回目	リハビリテーションチーム	理学療法士・作業療法士・言語聴覚士について
第5回目	理学療法士について	理学療法士の定義・役割・業務内容について
第6回目	理学療法について	運動療法・物理療法とは
第7回目	義肢装具について	装具・義足の目的・役割について
第8回目	義肢装具について	杖・車椅子について
第9回目	運動療法について	立位・歩行練習について
第10回目	運動療法について	関節可動域運動について・ストレッチについて
第11回目	運動療法について	筋力強化について
第12回目	物理療法について	温熱療法・寒冷療法・水治療法について
第13回目	障害について	国際障害分類(ICIDH)・国際生活機能分類(ICF)
第14回目	障害者福祉制度について	障害受容について・ノーマライゼーション・IL運動について
第15回目	まとめ	試験対策
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	生理学 I	(60)時間	前期	第Ⅱ学科1学年	講 師	小倉 基裕
到達目標	理学療法士が必要な人体の基本的な構造まで含めた臓器、身体の生理機能(働き)、特に運動機能との調節について必要な科学的知識を身につけリハビリテーションに際し実践できる知識を得る目標を持つ。					
履修上の注意	生理学を理解するためには、解剖学の「からだの構造」、生理学の「からだの機能」の知識を統合させる必要がある。丸暗記でなく、「なぜそうなるのか」を「考える姿勢」を身につける。国家試験への対策を含めてより深く生理学の知識を深める。専門科目へと進み、疾患を理解し、その機能を回復させるうえでも必須である。					
成績評価方法	毎回実施する高い基準を置いた小テストの結果を加味した上で、本試験結果(100%)を主たる評価基準とする					
教科書	教科書『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野』生理学(医学書院),副教科書:はやわかり生理学ハンドブック(ナツメ社)					
参考書	シンプル生理学(南江堂),生理学テキスト(文光堂),標準生理学(医学書院)					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	生命現象と人体	PTにとっての生理学、身体の階層性、生命現象、体内に含まれる水の重要性、臨床でも大事な体温、ホメオスタシスと負のフィードバックについて学ぶ
第2回目	細胞の構造と機能	細胞の構造と機能、細胞膜の電気現象 膜電位とは静止膜電位と活動電位の発生メカニズムについて学ぶ
第3回目	神経の興奮伝導と末梢神経(1)	神経細胞の構造、興奮の発生と伝導、末梢神経の種類について学ぶ
第4回目	神経の興奮と伝導と末梢神経(2)	自律神経、神経系の一つである生命維持機能を制御する自律神経について学ぶ
第5回目	神経の興奮と伝導と末梢神経(3)	シナプスにおける興奮の伝達 神経細胞(ニューロン)はシナプスを通して隣接神経細胞および骨格筋に情報をいかに伝達するかを学ぶ
第6回目	中枢神経系(1)	中枢神経系とは、運動系に関わる骨格筋へと指令される大脳皮質から脊髄の運動ニューロンにどのように伝達されるかを学ぶ
第7回目	中枢神経系(2)	中枢神経系とは、運動や姿勢に関わるに関する運動系に関連する脳幹、小脳、間脳(視床と視床下部)について学ぶ
第8回目	中枢神経系(3)	脳の高次機能、意思、思考、言語、記憶(学習)、行動、情動、睡眠と覚醒(意識)などの中枢神経系の大脳皮質の構造と機能について学ぶ
第9回目	中枢神経系(4)	大脳基底核と脳梁、辺縁系、脳室と脳脊髄液・血液脳関門について学ぶ
第10回目	筋と骨(1)	筋の分類、骨格筋、心筋、平滑筋 筋収縮と興奮収縮連関について学ぶ
第11回目	筋と骨(2)	骨 骨の構造、骨の形成と吸収、骨の成長、骨の老化について学ぶ
第12回目	感覚(1)	感覚とは、体性感覚の特徴、内臓感覚と関連痛について学ぶ
第13回目	感覚(2)	特殊感覚 感覚末梢の受容器、中枢神経系への伝導路 感覚に関連する大脳皮質について学ぶ
第14回目	血液(1)	血液の構成と機能、赤血球、白血球 免疫機能について学ぶ
第15回目	血液(2)	血小板、血漿、血液型、血液凝固について学ぶ 前期学習のまとめ
備考	あらかじめ教科書をよく読んで予習して講義に臨み、教科書、ノートをもとに毎回復習を行い、知識の積み重ねを可能にしておくこと。各項目の節目において小テストを実施し、知識の整理を行う。	

令和7年度 シラバス

科目名	生理学Ⅱ (60)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	非常勤講師
到達目標	前期に引き続き正常な生体の機能について、各器官独自の機能の発現と調節機序に基づいて理解させることを目指す。それら諸器官相互の協調的な働きにより初めて全体としての人体の働きが発現することを理解させる。そのために生体現象の機序をできるだけわかりやすく総合的に理解させる。また、将来、疑問や問題点が生じたときに、自ら参考書を参照し、自分自身で考える力を備えさせる。				
履修上の注意	生理学を理解するためには、解剖学の「からだの構造」、生理学の「からだのしくみ」の知識を統合させる必要がある。丸暗記でなく、「なぜそうなるのか」「考える姿勢」を身につける。国家試験への対策を含めてより深く生理学の知識を深める。専門科目へと進み、疾患を理解し、その機能を回復させるうえでも必須である。				
成績評価方法	実施した小テストも加味し、本試験結果を主たる評価基準とする。				
教科書	教科書:『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野』生理学(医学書院) 副教科書:はやわかり生理学ハンドブック(ナツメ社)				
参考書	シンプル生理学(南江堂) 生理学テキスト(文光堂) 標準生理学(医学書院)				

回 数	項 目	授業内容
第1・2回目	心臓と循環 1	血液の循環、心臓の興奮と刺激伝導系、心電図
第3・4回目	心臓と循環 2	血液のは拍出と血圧、心周期、前負荷・後負荷と収縮性、血圧の調節
第5・6回目	心臓と循環 3	微小循環と物質交換、静脈還流、臓器循環、リンパ循環
第7・8回目	呼吸とガスの運搬 1	外呼吸と内呼吸、気道と肺胞、呼吸運動
第9・10回目	呼吸とガスの運搬 2	呼吸気量、ガス交換とガス運搬
第11・12回目	呼吸とガスの運搬 3	呼吸の調節、病的呼吸
第13・14回目	尿の生成と排泄 1	腎臓の役割、尿の生成、クリアランス、排尿
第15・16回目	尿の生成と排泄 2	尿の性状と排尿異常、酸塩基平衡
第17・18回目	消化と吸收 1	消化の役割、口腔内消化と嚥下、食道における食物輸送、胃の役割と消化、十二指腸における消化と栄養素の吸収
第19・20回目	消化と吸收 2	大腸の役割、肝臓の役割
第21・22回目	内分泌 1	内分泌機能とホルモン、各内分泌腺から分泌されるホルモン1
第23・24回目	内分泌 2	各内分泌腺から分泌されるホルモン2
第25・26回目	代謝と体温	栄養素、エネルギー代謝、体温
第27・28回目	生殖と発生	男性生殖機能、女性生殖機能、受精・着床・胎児の発生
第29・30回目	成長と老化、生理学のまとめ	成長と老化、生理学Ⅱまとめと知識の整理
備考	あらかじめ教科書をよく読んで予習して講義に臨み、教科書、ノートをもとに毎回復習を行い、知識の積み重ねを可能にしておくこと。	

令和7年度 シラバス

科目名	運動生理学 (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	非常勤講師
到達目標	運動が身体へ及ぼす影響とそのメカニズムを生理学的観点から理解し、さらに発育発達による身体の成長やその機能、老化に伴う変化についても理解を深める。また、最新の運動生理学に関する知見についても知識を深める。				
履修上の注意	授業資料等を配布するが、授業中のポイントなどもメモすること。				
成績評価方法	本試験80%、授業態度20%で総合採点評価する。				
教科書	毎回プリント配布する。				
参考書	運動生理学に関する参考書を使用				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	運動の目的、進め方の説明・運動の重要性について	授業概要の説明、授業の目的と到達目標についてのガイダンスを行う。運動を行う意義について理解する。
第2回目	体温調節と熱中症	中枢の体温調節機能を理解する。
第3回目	体温調節と熱中症	熱中症のメカニズム、その予防法を理解する。
第4回目	運動と循環器	心臓の構造と機能について理解する。
第5回目	運動と循環器	運動による循環器系への影響について理解する。
第6回目	運動と呼吸器	呼吸器系の構造や機能について理解する。
第7回目	運動と呼吸器	運動時の酸素摂取量について学び、運動による呼吸器系への影響について理解する。
第8回目	運動と筋	骨格筋の構造と機能について理解する。
第9回目	運動と筋	運動による筋収縮について理解する。
第10回目	運動と骨代謝	骨の構造と機能について理解する。
第11回目	運動と骨代謝	骨を丈夫にする運動・食事について理解する。
第12回目	運動とエネルギー代謝	運動によるエネルギー代謝について理解する。
第13回目	運動と神経系	神経系の働き及び運動中の活動について理解する。
第14回目	運動疲労と脳	運動による疲労と脳活動の関係について理解する。
第15回目	まとめ	これまでに学習した運動生理学に関する内容を復習する。
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	運動学 I (30/60)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
実務経験	理学療法士として17年以上の実務経験あり				
到達目標	基礎的な人体構造、機能の理解。それを自分なりに表出できるように。				
履修上の注意	理学療法科学生としての自覚を持って臨むこと。				
成績評価方法	学科試験、出席状況等によって判定する				
教科書	基礎運動学(医歯薬出版)				
参考書	都度配布				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	下肢の運動総論	下肢の運動学的特徴
第2回目	下肢帯の運動(1)	下肢帯の構造
第3回目	下肢帯の運動(1)	下肢帯の機能
第4回目	股関節の運動(1)	股関節の構造
第5回目	股関節の運動(2)	股関節の機能
第6回目	膝関節の運動(1)	膝関節の構造
第7回目	膝関節の運動(2)	膝関節の機能
第8回目	足関節・足部の運動(1)	足関節・足部の構造
第9回目	足関節・足部の運動(2)	足関節・足部の機能
第10回目	下肢帯から下肢まとめ(1)	基本的な下肢の運動まとめ
第11回目	下肢帯から下肢まとめ(2)	基本的な下肢の運動(実技)
第12回目	頸部/体幹の運動(1)	頸部/体幹の運動について(1)
第13回目	頸部/体幹の運動(2)	頸部/体幹の運動について(2)
第14回目	頸部/体幹の運動(3)	頸部/体幹の運動について(3)
第15回目	姿勢について	姿勢について
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	運動学Ⅱ (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
実務経験	理学療法士として17年以上の実務経験あり				
到達目標	正常歩行動作や基本的動作の基本的特性を、解剖学、運動学、運動力学の観点から理解する。				
履修上の注意	理学療法科学生としての自覚を持って臨むこと。				
成績評価方法	学科試験、出席状況等によって判定する				
教科書	基礎運動学(医歯薬出版) 実践！動作分析(医歯薬出版)				
参考書	都度配布				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	オリエンテーション・運動学とは	身体運動の面と軸 身体に働く力について てこの原理について
第2回目	生体の構造・機能	運動器の構造と機能 神経系
第3回目	姿勢	姿勢と重心 立位姿勢に働く力
第4回目	体幹・股関節・膝関節・足関節のアライメントについて(1)	立位姿勢において、体幹・股関節・膝関節・足関節に働く外力と内力の関係について(1)
第5回目	体幹・股関節・膝関節・足関節のアライメントについて(2)	立位姿勢において、体幹・股関節・膝関節・足関節に働く外力と内力の関係について(2)
第6回目	体幹・股関節・膝関節・足関節のアライメントについて(3)	立位姿勢において、体幹・股関節・膝関節・足関節に働く外力と内力の関係について(3)
第7回目	歩行について(1)	歩行の基礎
第8回目	歩行について(2)	歩行時における各関節の動き
第9回目	歩行について(3)	歩行時における筋活動について
第10回目	歩行について(4)	歩行における推進力
第11回目	歩行について(5)	階段歩行での関節の動き、筋活動について
第12回目	起居動作・立ち上がり・着座動作について(1)	各動作の基礎
第13回目	起居動作・立ち上がり・着座動作について(2)	各動作における各関節の動きや筋活動について
第14回目	起居動作・立ち上がり・着座動作について(3)	階段歩行での関節の動き、筋活動について
第15回目	講義まとめ	講義まとめ
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	心理学	(30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
到達目標	心のはたらきのルールおよび心理学的介入のための基礎知識を学ぶ					
履修上の注意	講義項目についての理解を深めるため履修者による発表の時間を設けることがあります					
成績評価方法	学科試験(70%)・平常点(30%)					
教科書	図説教養心理学(ナカニシヤ出版)					
参考書	あればその都度紹介します					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	記憶の構造とはたらき	記憶の区分とはたらき、感覚記憶と短期記憶
第2回目	記憶の構造とはたらき	長期記憶、記憶の障害
第3回目	知性と感性	知能、知能検査、知能の発達と障害
第4回目	心の発達と心の危機	心の発達段階と問題、子どもの心の発達
第5回目	心の発達と心の危機	親子関係の問題、中年以降の心理的発達
第6回目	パーソナリティ	パーソナリティの理論、パーソナリティの形成
第7回目	パーソナリティ	パーソナリティの諸相、パーソナリティの測定
第8回目	学びのルール:学習理論	古典的条件づけ、道具的条件づけ
第9回目	学びのルール:学習理論	認知学習、情報処理の自動化
第10回目	感情	情動、感情の機能、ムード、感情の障害
第11回目	動機と覚醒水準	動機づけとは、動機づけの種類
第12回目	動機と覚醒水準	動機間の関係、動機づけと覚醒水準
第13回目	予備日	不足内容の補充
第14回目	まとめ(1)	第1週～第13週目の復習
第15回目	まとめ(2)	第1週～第13週目の復習
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	病理学概論 (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	非常勤講師
到達目標	病理学はヒトの病気の成り立ちを学ぶ基礎科目と臨床科目との架け橋となる学問である。理学療法学の専門家をめざす学生を対象に、病気の理屈—病気とは何か、その原因、転帰—を学習します。病気についての知識、理解を深め、さらに興味を持てるようにしたい。国家試験にも対応したい。				
履修上の注意	多くの学生が病気に対する知識や理解を深め、興味をもちつつ自分の専門分野を進んで行けることを期待する				
成績評価方法	毎回小テストを行いこの結果を元に 筆記本試験100%を目指して欲しい				
教科書	医療系学生のための病理学(講談社)				
参考書	必要に応じ講義資料を配付する				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	病理学総論(1)	病理学で学ぶこと 病理学の概要 病因論 先天性疾患と遺伝病①
第2回目	病理学総論(2)	先天性疾患と遺伝病② 前回に続き先天異常と遺伝子異常について学ぶ
第3回目	病理学総論(3)	細胞・組織障害 細胞の損傷とその原因 組織の変性と細胞死 アポトーシス
第4回目	病理学総論(4)	物質代謝傷害 修復と再生 創傷治癒 肉芽 器質化
第5回目	病理学総論(5)	循環障害 局所の循環障害(浮腫 充血 うつ血 出血 血栓症 塞栓症 虚血と梗塞)
第6回目	病理学総論(6)	炎症と感染症 炎症の定義 炎症に於ける血管・白血球の反応
第7回目	病理学総論(7)	免疫と免疫異常 先天性免疫不全症候群、後天的眼演繹不全症候群(AIDS)
第8回目	病理学総論(8)	腫瘍 肿瘍の概念 肿瘍の形態と分類
第9回目	病理学各論(1)	循環器系 全身の循環障害(ショック 高血圧症 播種性血管内凝固症候群)
第10回目	病理学各論(2)	呼吸器系 それぞれの疾患について病態およびその形成メカニズム
第11回目	病理学各論(3)	消化器系 消化器系疾患の主要疾患
第12回目	病理学各論(4)	造血器系 造血器疾患に関して骨髄を中心に 悪性リンパ腫
第13回目	病理学各論(5)	泌尿器系 生殖器系 腎・泌尿器系、生殖器系の主要疾患
第14回目	病理学各論(6)	運動器系及び軟部組織系 運動器系の主要疾患
第15回目	病理学各論(7)	脳・神経系 皮膚・感覚器系 神経系の異常所見 皮膚については代表的な炎症性疾患・良性腫瘍・悪性腫瘍に関して概説
備考	講義範囲は教科書を読んでおいて下さい。講義終了毎に小テストを実施します。	

令和7年度 シラバス

科目名	臨床心理学	(30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
到達目標	心理的問題・不適応行動の改善援助のために用いられる様々なアプローチ法についての基礎的知識を身につける					
履修上の注意	講義内容の理解を深めるために受講生による発表の時間を設けることがあります					
成績評価方法	学科試験(70%)・小テスト(30%)					
教科書	リハベーシック 心理学・臨床心理学 医薬出版社					
参考書	あればその都度紹介します					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	イントロダクション	臨床心理学とは
第2回目	心理検査(1)	アセスメントとは
第3回目	心理検査(2)	人格検査、発達検査、知能検査
第4回目	心理検査(3)	人格検査、発達検査、知能検査
第5回目	心理検査(4)	神経心理学的検査
第6回目	心理検査(5)	心理検査まとめ
第7回目	心理療法(1)	精神分析、分析心理学
第8回目	心理療法(2)	精神分析、分析心理学
第9回目	心理療法(3)	クライエント中心療法
第10回目	心理療法(4)	行動療法、認知行動療法
第11回目	心理療法(5)	森田療法、内観療法
第12回目	心理療法(6)	遊戯療法、自律訓練法、集団療法
第13回目	傷害受容	傷害受容
第14回目	心理療法(7)	心理療法まとめ
第15回目	まとめ	第1週目～第14週目の振り返り
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	医療倫理 (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
到達目標	医療倫理とは何かを学び、倫理的配慮について考える経験を積む。				
履修上の注意	グループ発表もするので積極的な参加をお願いします。				
成績評価方法	中間試験・期末試験(50%) グループ発表(50%)				
教科書	特になし				
参考書	その通度紹介します。				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	オリエンテーション	医療倫理とは
第2回目	患者の権利	インフォームドコンセント
第3回目	患者の権利	パターナリズム
第4回目	患者の権利	ヘルシンキ宣言について
第5回目	グループディスカッション	症例1
第6回目	グループディスカッション	症例2
第7回目	グループディスカッション	症例3
第8回目	グループディスカッション	症例4
第9回目	グループディスカッション	症例5
第10回目	グループディスカッション	症例6
第11回目	グループディスカッション	症例7
第12回目	グループディスカッション	症例8
第13回目	グループディスカッション	症例9
第14回目	グループディスカッション	症例10
第15回目	総復習	総復習
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	理学療法概論	(30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
実務経験	理学療法士として14年以上の実務経験あり					
到達目標	理学療法士の役割・仕事を知るとともに理学療法の実際を理解する。					
履修上の注意	生涯続けていく仕事について理解するために不明な点は遠慮なく質問する。					
成績評価方法	学科試験(100%) 出席状況も加味します					
教科書	15レクチャーシリーズ理学療法テキスト 理学療法概論(中山書店)					
参考書						

回 数	項 目	授業内容
第1回目	理学療法概論	理学療法の概要とリハビリテーションにおける理学療法の役割
第2回目	理学療法の背景(1)	障害の概念・分類、保険制度
第3回目	理学療法の背景(2)	歴史・法律、職業倫理、日本理学療法士協会
第4回目	理学療法の構成	理学療法の流れ
第5回目	理学療法に必要な知識と実習	理学療法における、科目の関連性
第6回目	理学療法の主対象(1)	中枢神経系の病態や理学療法介入
第7回目	理学療法の主対象(2)	運動器系の病態や理学療法介入
第8回目	理学療法の主対象(3)	内部障害系の病態や理学療法介入
第9回目	理学療法の主対象(4)	がん、介護予防における理学療法の役割
第10回目	病期・職域別の理学療法(1)	急性期における理学療法の役割
第11回目	病期・職域別の理学療法(2)	回復期における理学療法の役割
第12回目	病期・職域別の理学療法(3)	生活期(維持期)における理学療法の役割
第13回目	病期・職域別の理学療法(4)	在宅における役割
第14回目	病期・職域別の理学療法(5)	行政における役割
第15回目	病期・職域別の理学療法(6)	研究における役割
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	解剖学Ⅱ (60)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	非常勤講師
到達目標	リハビリの基礎となる人体の構造を機能との関連で理解する				
履修上の注意	用語の記憶にとらわれず、ストーリーとして内容の理解に努める				
成績評価方法	学期末の筆記試験				
教科書	解剖学アトラスⅠ～Ⅲ(文光堂)				
参考書	なし				

回 数	項 目	授業内容
第1・2回目	神経系－1	①脳の区分 ②大脳皮質(1次中枢、連合野)
第3・4回目	神経系－2	①錐体路と錐体外路 ②小脳と基底核(運動の調節)
第5・6回目	神経系－3	①脳幹(意識と睡眠) ②大脳辺縁系(感情・記憶)
第7・8回目	神経系－4	①視床 ②脊髄(感覚の伝導路)
第9・10回目	神経系－5	①骨髄 ②脳の血管
第11・12回目	神経系－6	脳神経Ⅰ、Ⅱ：鼻腔(嗅覚)、眼(視覚)
第13・14回目	神経系－7	脳神経Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ：眼球運動
第15・16回目	神経系－8	脳神経Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ：顔(表情・そしゃく)、耳(聴・平衡覚)
第17・18回目	神経系－9	脳神経Ⅸ～Ⅻ：咽頭(えん下)、喉頭(発声)
第19・20回目	内臓－1	循環器(心臓、血管)
第21・22回目	内臓－3	呼吸器(気管、肺)
第23・24回目	内臓－3	泌尿器(腎、膀胱)
第25・26回目	内臓－4	消化管(食道～一二指腸)
第27・28回目	内臓－5	消化管(空腸～直腸)、肝・胆・脾
第29・30回目	内臓－6	血液、リンパ器官、内分泌器官、生殖器
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	物理療法学 (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
実務経験	理学療法士として8年以上の実務経験あり				
到達目標	物理療法を理学療法の一手段として活用でき、より多くの患者の治療に貢献できるようになる。 適応・禁忌を確実に覚える。				
履修上の注意	実技の際はジャージ等動きやすい服装で行う				
成績評価方法	筆記試験(100%)				
教科書	15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 物理療法学(中山書店)				
参考書					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	物理療法の基礎	分類と種類、臨床適応の流れ、対象
第2回目	温熱療法	伝導熱 ホットパック、パラフィン
第3回目	温熱療法	輻射熱 赤外線療法
第4回目	温熱療法	エネルギー変換熱 超短波、極超短波療法
第5回目	光線療法	紫外線療法、レーザー療法
第6回目	寒冷療法	各種寒冷療法
第7回目	水治療法	過流浴、気泡浴、交代浴
第8回目	超音波療法	超音波療法の原理、特性、適応、禁忌
第9回目	電気刺激療法 ①	総論
第10回目	電気刺激療法 ②	経皮的神経電気刺激、干渉波電流、微弱電流刺激
第11回目	電気刺激療法 ③	神経筋電気刺激、高電圧パルス電流 ロシアンカレント、筋電誘発電気刺激
第12回目	電気刺激療法 ④	機能的電気刺激療法、バイオフィードバック療法
第13回目	牽引療法	牽引療法の適応、禁忌、効果、種類
第14回目	マッサージ療法	目的、作用、方法
第15回目	リスク管理	機器のリスク、点検、医療事故、危険予知
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	理学療法学基礎演習 I (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	鎌田 啓太
実務経験	理学療法士として5年以上の実務経験あり				
到達目標	理学療法の土台となる医学系科目(運動学・人間発達学)の知識を固める筋の起始停止の学習				
履修上の注意	医療人の必須スキルとして真剣に授業に臨むこと				
成績評価方法	定期試験(100%)				
教科書	基礎運動学(医歯薬出版) 必修ポイント 専門基礎分野 基礎医学(医歯薬出版)				
参考書	特になし				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	筋の起始停止 ①	頸部筋の起始停止
第2回目	筋の起始停止 ②	体幹筋の起始停止
第3回目	筋の起始停止 ③	上肢筋の起始停止 ①
第4回目	筋の起始停止 ④	上肢筋の起始停止 ②
第5回目	筋の起始停止 ⑤	下肢筋の起始停止 ①
第6回目	筋の起始停止 ⑥	下肢筋の起始停止 ②
第7回目	筋の起始停止確認試験	第1回目～6回確認試験
第8回目	基礎医学復習(運動学) ①	運動学総論、骨格系
第9回目	基礎医学復習(運動学) ②	顔面・頭頸部・体幹の運動と筋、呼吸運動
第10回目	基礎医学復習(運動学) ③	上肢の運動、上肢の筋
第11回目	基礎医学復習(運動学) ④	下肢の運動、下肢の筋
第12回目	基礎医学復習(運動学) ⑤	姿勢と歩行
第13回目	基礎医学復習(運動学) ⑥	運動学習
第14回目	基礎医学復習 (人間発達学) ①	小児の反射・反応
第15回目	基礎医学復習 (人間発達学) ②	運動発達・発達評価
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	理学療法学基礎演習Ⅱ (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
実務経験	理学療法士として5年以上の実務経験あり				
到達目標	講義、体験や実技を通して、理学療法分野における基礎知識・技術を習得する。				
履修上の注意	私語を慎み、主体的に参加すること。				
成績評価方法	実技試験(100%) 出席状況も加味				
教科書	配付資料で対応				
参考書	都度配布				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	人体の構造	骨の触診 上肢、体幹
第2回目	人体の構造	骨の触診 下肢
第3回目	人体の構造	筋の触診 上肢、体幹
第4回目	人体の構造	筋の触診 下肢
第5回目	バイタルチェック	バイタルチェック
第6回目	形態測定	形態測定
第7回目	動作介助	寝返り・起き上がり動作介助
第8回目	動作介助	立ち上がり・歩行動作介助
第9回目	MMT	MMT 上肢・体幹
第10回目	MMT	MMT 下肢
第11回目	ROM	ROM-T 上肢
第12回目	ROM	ROM-T 下肢
第13回目	車椅子・補装具について	車いす・杖・松葉杖
第14回目	医療面接	医療面接・情報収集
第15回目	まとめ	総復習
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	理学療法学基礎演習Ⅲ (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専門教員
実務経験	理学療法士として5年以上の実務経験あり				
到達目標	理学療法の土台となる医学系科目(解剖学・生理学)の知識を固める				
履修上の注意	医療人の必須スキルとして真剣に授業に臨むこと				
成績評価方法	定期試験(100%)				
教科書	必修ポイント 専門基礎分野 基礎医学(医歯薬出版)				
参考書	必要に応じて配布する				

回 数	項 目	授業内容
第1回目	解剖生理学 I (植物性機能) ①	循環器系
第2回目	解剖生理学 I (植物性機能) ②	消化器系
第3回目	解剖生理学 I (植物性機能) ③	泌尿器系
第4回目	解剖生理学 I (植物性機能) ④	生殖器系
第5回目	解剖生理学 I (植物性機能) ⑤	呼吸器系
第6回目	解剖生理学 I (植物性機能) ⑥	代謝系
第7回目	解剖生理学 I (植物性機能) ⑦	体温調節
第8回目	解剖生理学 I (植物性機能) ⑧	内分泌系、細胞の発生と組織
第9回目	解剖生理学 II (動物性機能) ①	中枢神経系 ①
第10回目	解剖生理学 II (動物性機能) ②	中枢神経系 ②
第11回目	解剖生理学 II (動物性機能) ③	末梢神経系 ①
第12回目	解剖生理学 II (動物性機能) ④	末梢神経系 ②
第13回目	解剖生理学 II (動物性機能) ⑤	骨格筋
第14回目	解剖生理学 II (動物性機能) ⑥	感覚
第15回目	解剖生理学 II (動物性機能) ⑦	体表解剖
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	理学療法評価学 I	(30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	林 健二
実務経験	理学療法士として10年以上の実務経験あり					
到達目標	理学療法評価法の基礎を学び、形態測定・ROM・疼痛検査を行う目的を理解し臨床現場で実施できる。					
履修上の注意	一方的に講義を聴く受動的な授業方針にならないようにする。能動的で自主性に富んだ授業をめざす。					
成績評価方法	実技試験(80点) 出席・授業への取り組み(20点) 合計100点					
教科書	理学療法学テキストⅡ 理学療法評価法(神陵文庫)					
参考書	必修ポイント 専門基礎分野 基礎医学(医歯薬出版)					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	理学療法評価学 総論	理学療法評価法の種類・意義・方法を学び、流れをイメージできる
第2回目	形態測定 ①	実技(下肢長/上肢長)
第3回目	形態測定 ②	実技(上腕/前腕/大腿/下腿 周径測定)
第4回目	関節可動域(ROM)総論	関節可動域検査の意義/方法を学ぶ
第5回目	関節可動域(ROM)測定 ①	実測:肩甲帯(屈曲/伸展/拳上/引き下げ)肩関節(屈曲/伸展)
第6回目	関節可動域(ROM)測定 ②	実測:肩関節(外転/内転/外旋/内旋/水平屈曲/水平伸展)
第7回目	関節可動域(ROM)測定 ③	実測:肘関節(屈曲/伸展)、前腕(回内/回外)
第8回目	関節可動域(ROM)測定 ④	実測:手関節(掌屈/背屈/橈屈/尺屈)、母指、手指
第9回目	関節可動域(ROM)測定 ⑤	実測:股関節(屈曲/伸展/外転/内転/外旋/内旋)
第10回目	関節可動域(ROM)測定 ⑥	実測:膝関節(屈曲/伸展)、足関節(背屈/底屈/外返し/内返し)
第11回目	関節可動域(ROM)測定 ⑦	実測:足指、母指(屈曲/伸展)、頸部(屈曲/伸展)
第12回目	関節可動域(ROM)測定 ⑧	実測:体幹、胸腰部(屈曲/伸展/回旋/側屈)
第13回目	痛みの評価	実技(VAS法、NRS法)を実践する
第14回目	実技テスト	ROM測定 上肢・下肢について理解確認を行う
第15回目	国家試験問題の説明	関連する過去問題を解いて理解を深める
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	理学療法評価学Ⅱ (30)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員
実務経験	理学療法士として15年以上の実務経験あり				
到達目標	新・徒手筋力検査法の各種検査が健常者に対して適切に実施できる				
履修上の注意	装飾品は外すこと、測定器具を持参すること、携帯電話は鞄にしまっておくこと				
成績評価方法	筆記試験(30%)、実技試験(70%) ※授業態度が不良な者は減点します。				
教科書	新・徒手筋力検査法(協同医書出版社)				
参考書					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	オリエンテーション	筋力測定とは
第2回目	上肢 ①	肩関節の筋力
第3回目	上肢 ②	肩関節の筋力
第4回目	上肢 ③	肘関節の筋力
第5回目	上肢 ④	手関節の筋力
第6回目	上肢 ⑤	肩甲骨の筋力
第7回目	上肢 ⑥	手指の筋力
第8回目	下肢 ①	股関節の筋力
第9回目	下肢 ②	膝関節の筋力
第10回目	下肢 ③	足関節の筋力
第11回目	下肢 ④	足趾の筋力
第12回目	脳神経	脳神経支配筋の筋力
第13回目	頸部	頭頸の筋力
第14回目	体幹	体幹の筋力
第15回目	確認試験	筆記試験(選択問題)
備考		

令和7年度 シラバス

科目名	臨床見学実習 (45)時間	後期	第Ⅱ学科1学年	講 師	専任教員 臨床実習指導者
到達目標	1. 実際の医療施設における理学療法の外観を学び、理学療法士の業務について目で見て感じ学ぶ。 2. 医療の現場において様々な場面に適切な接遇で臨めるようになる。 3. 対象者様や病院スタッフとスムーズにコミュニケーションを取れるようになる。				
履修上の注意	各実習施設に応じて準備すること。				
成績評価方法	実習前評価[OSCE](20%)、実習施設評価(60%)、実習後評価[実習報告会](20%)				
教科書	特になし				
参考書	購入したすべての教科書				

講義計画・講義内容

1. 実習は同一の臨床実習施設において1週間行われる。
2. 内容は、各施設における実習指導者の指導・監督の下、患者と直接かかわっていく。他職種とのかかわりや理学療法士の業務における治療・評価のイメージをつける。
3. 1年次の授業で学んだ知識を実際の臨床現場で体験し、理解を深める。
4. 学内においては実習前に実習前実技試験、実習終了後に実習報告会(発表)を行う。

臨床見学実習では、実際の医療施設での見学実習を行う。実際の理学療法士の仕事の業務や他職種との連携を目の当たりにし、チーム医療についてのイメージを身に着ける。また、社会人としてのマナーや接遇について、実際の患者やスタッフのやり取りを通して学ぶ。これから学習していく理学療法についてのモチベーションの向上とイメージを確立させる。

備考